

日本放送協会 理事会議事録

(平成26年12月 9日開催分)

平成26年12月26日(金)公表

<会議の名称>

理事会

<会議日時>

平成26年12月 9日(火) 午前9時00分～10時00分

<出席者>

靱井会長、堂元副会長、塚田専務理事、吉国専務理事、石田専務理事、
板野専務理事、木田理事、福井理事、森永理事、井上理事、
浜田技師長
上田監査委員

<場所>

放送センター 役員会議室

<議事>

靱井会長が開会を宣言し、議事に入った。

付議事項

1 審議事項

- (1) 平成27年度予算・事業計画における要員計画について
- (2) 平成27年度収支予算編成要綱
- (3) 平成27年度国内放送番組編成計画について
- (4) 平成27年度国際放送番組編成計画について

2 報告事項

(1) 2014年11月全国個人視聴率調査の結果について

議事経過

1 審議事項

(1) 平成27年度予算・事業計画における要員計画について

(人事局)

平成27年度予算・事業計画における要員計画について、審議をお願いします。

27年度の要員計画については、本部・地域において安定的に循環可能な業務・要員体制を構築する「全体最適」の実現に向けて、抜本的に業務を見直し、経営資源の再配分を行っていきます。これにより、限られた経営資源の中で、制作・取材力の強化や新サービスへの対応等に必要なパワーを確保し、27年度からの3か年経営計画の実施体制を整備していきます。

27年度の要員計画については、業務のアウトソーシングやスクラップなどの見直しで105人程度の要員削減を行う一方、制作・取材力の強化や安定的な業務体制確保への対応等への増員配置を105人程度予定しています。この結果、27年度の予算人員は1万0,242人となります。

(吉国専務理事) 今回の要員計画によって、全体最適で計画している要員シフトがどの程度進むと考えていますか。

(人事局) おおむね計画どおり進んでいると考えています。

(吉国専務理事) できるだけ前倒しで進めるよう、取り組んでください。

(森永理事) 全体最適の計画を策定した後に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催や、国際放送の充実強化など、計画の見直しが必要となるような後発事象がいろいろと発生しています。状況が大きく変わるなか、要員の大枠を変えずに、中のやりくりだけで対応できるものでしょうか。

(人事局) 東京オリンピック・パラリンピックに向けた準

備体制の整備や国際放送の充実強化等は、経営課題として対応が必要なものと考えています。重点を置くべき事項には優先順位をつけて、できる限り対応したいと思っており、各部局とも調整を進めているところです。2月までにまとめたいと思います。

(吉国専務理事) 大枠の中で、後発事象への要員の不足に対応するためには、さらに棚卸を進めていく必要がありますね。

(会 長) 105人の要員削減と増員配置についての具体内容がわかりません。

(人事局) 具体内容は、2月に決定していただきたいと考えています。

(副会長) 今日は、27年度の予算人員を1万0,242人とすることについての審議ですね。

(福井理事) 本日午後の経営委員会で「平成27年度収支予算編成要綱」が審議されますが、その中の予算事業計画に記載する要員計画に、この数字が反映されることとなります。

(会 長) 実際にどの部局のどの業務で何人を削減し、どこに何人を増員配置するのか、その具体的な内訳については、早急に取りまとめてください。

予算人員については、原案どおり決定します。

(2) 平成27年度収支予算編成要綱

(経理局)

平成27年度予算の基本的な考え方および事業計画の重点事項、それに基づく収支予算の具体的な内容と予算額について、「平成27年度収支予算編成要綱」として取りまとめましたので、審議をお願いします。

この事業計画を織り込み、27年度予算を編成します。

本件が了承されれば、本日開催の第1226回経営委員会に審議事項として提出します。その後、必要があれば予算の調整を行い、総務大臣に提出する収支予算、事業計画、資金計画からなる予算書について、1月に経営委員会の議決を求める予定です。

(会 長) 原案どおり了承し、本日の経営委員会に諮ります。

(3) 平成27年度国内放送番組編成計画について

(編成局)

平成27年度国内放送番組編成計画について、審議をお願いします。

平成27年度国内放送番組編成計画は、平成27年度国内放送番組編集の基本計画に基づき、放送番組時刻表や編成計画の要点、新設番組の概要、部門ごとの定時放送時間および比率、地域放送時間、補完放送等の放送計画などをまとめたものです。

各波の編成計画の要点については、次のとおりです。

総合テレビジョンは、人々の「命と暮らしを守る」正確で迅速な報道を行います。日本と世界の課題を読み解き、社会が進むべき方向を探る基盤となるニュースや番組を強化します。また、創造的な文化・教養・娯楽番組などをバランスよく編成し、幅広い世代に信頼・支持されるチャンネルをめざします。世界水準の高品質な番組を制作するとともに国際放送とも連携し、NHK全体の魅力を高めます。

教育テレビジョン（Eテレ）は、趣味・生活・教育・福祉・文化芸術など多彩な番組を編成し、幅広い世代の“知りたい”“学びたい”に応えます。いじめ・防災などの重要テーマに取り組むとともに、青少年や子どもたちの考える力、表現する力を育て、発表の場を提供していくことで、教育放送としての魅力を高めます。また、従来の特定ジャンルによる「ゾーン編成」を見直し、視聴者のニーズに的確に応える編成を行います。インターネットとの連携を深め、新しい番組サービスの開発にも取り組みます。

BS1は、「ナマの感動を届けるスポーツ」、「世界のいまを伝える国際情報」、「時代を掘り下げるドキュメンタリー」の3本柱を軸に、柔軟かつ戦略的な番組編成で、新規視聴者の開拓をめざします。スポーツでは、国内外の注目度の高いソフトを数多く編成するほか、スポーツを自ら楽しむ人たちに向けた番組枠を新設し、地域密着型番組も拡充するなど、多様な視聴者のニーズに応じていきます。報道番組では、経済情報番組を「経済フロントライン」として日曜夜から土曜夜に移設します。平日の「国際報道2015」とともに内容の充実を図り、午後10

時台をニュース情報番組の時間帯として定着させていきます。関心の高いテーマについては、「BS 1スペシャル」などを機動的に編成し、視聴者の関心にタイムリーに応じていきます。

BSプレミアムは、幅広い世代が楽しめる“知的エンターテインメントチャンネル”として、他の波やメディアにはない個性的でインパクトのあるコンテンツを充実させると同時に、世界にも通用する高品質な大型番組を開発し、多彩で魅力的な編成で新しい視聴者層の拡大をめざします。

ラジオ第1放送は、災害などから命や暮らしを守る“安心ラジオ”としての機能強化に、引き続き取り組みます。さらに、健康や介護、詐欺被害の防止など、より広く身の回りの安心・安全情報を伝えることで、身近で役立つメディアとしての存在感を発揮します。また、音声基幹波として、若年層から中高年まで幅広いリスナーの期待に応えるため、平日夜間帯の刷新と土日の若者向けゾーンの強化を図ります。インターネットの活用を進め、双方向性などラジオの強みをさらに高めるとともに、放送開始90年の節目に、音声アーカイブスを活用しラジオの新たな魅力を探る番組を編成します。

ラジオ第2放送は、“生涯学習波”として、語学や高校講座などの教育番組のほか、幅広い世代の知的欲求に応える新たなテーマの教養番組を開発し、放送します。インターネットと放送の連携をさらに深め、“いつでも”“どこでも”学べる機会を提供し、在日外国人向け番組も編成します。

FM放送は、“総合音楽波”として、さまざまなジャンルの音楽番組をはじめ、オーディオドラマや古典芸能など多彩な番組で構成し、本格派から入門者まで多様なリスナーのニーズに応えます。また放送開始90年にあたり、貴重な音源を活用した番組なども編成します。災害など緊急時には、ラジオ第1放送と連携して機動的な編成を行い、地域情報波としてきめ細かなライフライン情報を提供します。

本件が決定されれば、平成27年度国内放送番組編集の基本計画の議決とあわせて、27年1月13日開催の経営委員会に報告します。

(会 長) 原案どおり決定します。

(4) 平成27年度国際放送番組編成計画について

(国際放送局)

平成27年度国際放送番組編成計画について、審議をお願いします。

平成27年度国際放送番組編成計画は、平成27年度国際放送の放送番組編集の基本計画に基づき、放送番組時刻表、編成計画の要点、放送時間と部門別定時放送時間および比率、ラジオ国際放送の使用言語別放送時間などをまとめたものです。

テレビジョン国際放送の英語による外国人向け放送（NHKワールドTV）は、日本時間の平日夜間に45分間の大型ニュース番組を新設し、日本とアジアでいま何が起きているのか、深く分かりやすく伝えます。現場からの中継やリポートを軸に一日の動きをせき止め、専門家や取材記者の解説を交えてニュースの核心に迫ります。また、さまざまな分野で活躍するキーパーソンへのインタビューや多彩な特集企画では、日本の視点から、アジアや世界の「いま」を見つめます。

また、世界のオピニオンリーダーたちによる大型の国際討論番組を新設し、日本と世界が直面する課題の解決に向けて提言します。グローバルなメディアとしての存在感を示し、NHKワールドTVの認知度の向上を図ります。

さらに、平日は、北米・アジア・欧州の視聴しやすい時間帯に、それぞれの地域の視聴傾向にあわせて、日本の産業経済の動向や世界に貢献する最先端の科学技術・観光・食・文化などの情報番組を効果的に編成します。週末は、アニメやエンターテインメントなど、多彩で豊かな番組を編成し、世界に通用するコンテンツの開発を目指します。

テレビジョン国際放送の日本語による在外邦人向け放送（NHKワールド・プレミアム）は、国内で放送するニュース・情報番組を拡充するほか、海外の動きを伝えるニュース番組や、東日本大震災からの復興への取り組みを伝える番組、日本列島各地の表情を伝える番組など、内外の最新の情報を届けます。また、海外で暮らす日本人や旅行者の重要なライフラインとして、内外で起きた大規模な地震・津波などの自然災害や事件・事故などの緊急事態発生時には、速やかにニュースを特設するなど、迅速・的確な情報の提供に努めます。

ラジオ国際放送（NHKワールド・ラジオ日本）の多言語による外国人向けサービスは、日本の最新情報や話題を、17の言語を通じて現地

(国際放送局) まだ検討段階ですが、アメリカや日本のオピニオンリーダーの方々に出演を依頼して、その時々テーマについて討論していただくという形を考えています。

(会 長) 3月末から新年度編成となりますが、海外ではこれからクリスマス休暇の時期ともなりますので、人選も含め、早めに準備を進めてください。

原案どおり決定します。

2 報告事項

(1) 2014年11月全国個人視聴率調査の結果について

(放送文化研究所)

2014(平成26)年11月に実施した、全国個人視聴率調査の結果について報告します。

この調査は、11月10日月曜日から16日日曜日までの1週間、全国の7歳以上の男女3,600人を対象に、配付回収法による24時間時刻目盛り日記式(個人単位)で実施しました。有効数は2,344人、有効率は65.1%でした。

NHKと民放を合わせたテレビ全体の視聴時間は、3時間42分で、昨年より10分ほど短くなりました。10年前(2004年)は4時間を超えていましたので、この10年間で緩やかに減少しています。そのうち、地上波とBSを合わせたNHK全体の視聴時間は1時間06分で、この10年間は横ばいで推移しています。一方、民放全体では、2時間36分と10年前から短くなっており、この10年間の視聴時間の減少は、主に民放テレビの視聴の減少によるものと言えます。

テレビ全体の視聴時間を男女年層別に10年前と比べてみると、60代・70歳以上といった高年齢層ほど視聴時間が長くなるという傾向は変わりませんが、男性70歳以上を除くほぼ全ての年層で、減少傾向が見られます。

総合テレビの週間接触者率は58.7%で、この20年で最も低かった2010年・2011年と同程度となりました。民放地上波は、2010年以降は減少傾向が続き、今回は84.9%と、この20年で最も低い数字となっています。それに伴い、テレビ全体の接触者率も減少傾向にあり、今回は91.9%となりました。テレビは、NHK・民放ともに、

この20年で最も接触者率が低い状況にあります。総合テレビの週間接触者率の推移を男女年層別に見ると、継続的に減少しているのは男性40代で、前年に減少した男性50代も、低めの値が続いています。一方、男性30代・女性20代は、この5年間では最も高い値となりました。民放地上波の接触者率を見ると、男性の幅広い年層で減少しています。テレビ全体では、男性50代は93%が接触しているものの、男性40代は88%と2010年に比べると7ポイント減少しており、いわゆる「テレビ離れ」が起きていることがわかります。

この男性40代について、平日のテレビの見方を30分ごとの平均視聴率で見ると、総合テレビでは大きな変化はありませんが、民放地上波では、2010年から午後9～10時台でやや減少しています。近年、民放地上波を中心に、主に夜間帯にテレビが見られなくなってきており、それが接触者率の減少につながっていると考えられます。

総合テレビでよく見られた番組は、連続テレビ小説「マッサン」、大河ドラマ「軍師官兵衛」と、「NHKニュース7」で、傾向は例年と変わりません。NHKと民放全体でよく見られた番組は、関東では、トップは「マッサン」でした。民放テレビでは、日本テレビの日曜夜間の番組や、テレビ朝日のドラマ「ドクターX」がよく見られました。近畿では、昨年、総合テレビの週間接触者率が下がり初めて50%を割りましたが、今回は回復しており、上位4番組は「マッサン」、「軍師官兵衛」、「鶴瓶の家族に乾杯」、「ニュース845」と、NHKの番組が占めました。

「マッサン」は、総合テレビの番組視聴率は15.0%で、前年の「ごちそうさん」とほぼ同程度と、よく見られています。男女年層別では、女性50代で24%と増加したほか、女性20代が11%と好調です。女性20代の視聴率が10%を超えたのは、1992年以来22年ぶりで、女性20代の接触者率を引き上げた要因のひとつであると考えられます。また、「マッサン」は、BSプレミアムの視聴率が、前々年、前年の連続テレビ小説と比べて増加しています。特に、男性70歳以上の視聴率が前々年より増加するなど、高年層の視聴が増えています。「軍師官兵衛」は、前々年の「平清盛」と比べて視聴率が増加し、2011年「江～姫たちの戦国～」と同程度となりました。年層別に見ると、30代以下では「平清盛」や「八重の桜」よりもよく見られ、視聴層の広がりが見られました。男性30代以下では、月曜日の「サラメシ」、木曜日の「超

絶 凄 (すご) ワザ！」など、平日午後11時台の番組の接触率が6%と、前年の2%に比べて高くなり、視聴の広がりが見られました。

Eテレの週間接触者率は25.1%で、前々年、前年と比べて減少しています。男女年層別では、男性のほとんどの年層や女性7～19歳、40代や60代といった幅広い層で低めの値となり、全体の接触者率の減少につながったとみられます。

Eテレの平日の30分ごとの平均視聴率を見ると、子ども番組を放送している朝の7時台前半で、前年に比べ減少しています。

衛星放送については、自宅で見ることができると答えた人の割合は、前年とほぼ同様で49.9%です。BSプレミアムの週間接触者率は14.2%で、2011年から増加しています。一方、BS1は7.9%で、2011年から減少しています。BSプレミアムでよく見られた番組は、「マッサン」、韓国ドラマ「奇皇后・ふたつの愛涙の誓い」、「にっぽん縦断こころ旅」です。「にっぽん縦断こころ旅」は、午前7時台と午後7時台の放送がともに上位に入っており、幅広い年層でよく見られています。

ラジオ各波の週間接触者率は、NHKと民放を合わせたラジオ全体は、前々年から前年にかけて減少しましたが、今回は、前々年並みに回復しました。NHKラジオ全体は、横ばいを維持しています。ラジオ第1では、「ラジオ体操」や朝のニュースなどがよく聴かれています。

以上で付議事項を終了した。

上記のとおり確認した。

平成26年12月24日

会 長 靱 井 勝 人